

地域移行セミナー（まとめ）

1. 日 時：平成23年1月26日（火） 13:30～15:30
2. 場 所：守山保健所 多目的ルーム
3. 参加者：32名
4. 内容：1) 実践報告「身体障害者施設からの地域移行を考える」
守山区障害者地域生活支援センター 馬淵和彦
2) 質疑応答・意見交換
3) その他

1) 実践報告「身体障害者施設からの地域移行を考える」

○これまでの経過

- ・ H20.9 Aさん（50代男性、身障手帳1級、脳性マヒ、区分6）の取り組みを開始
課題（①家族の理解②生活介護の利用③住居探し④ヘルパーの確保）が持ち上がり、H21.1
自立支援協議会に協力を要請した。

○自立支援協議会に投げかけた理由

- ・ 一施設の問題としてではなく、地域全体の問題としてとらえてもらう
- ・ 情報を公開することにより、皆に関心を持ってもらう
- ・ 幅広い協力者を求める
- ・ 施設に真剣に取り組んでもらう
- ・ できなかった場合は地域課題として明らかにしていく

○自立支援協議会に投げかけた効果

- ・ 本人自ら訴えたことによって皆で何とかしようという思いが高まった
- ・ ヘルパー派遣を申し出てくれる事業所が現れた
- ・ 住居探しに協力を申し出てくれる業者が現れた
- ・ 支給決定がスムーズになされた
- ・ 近隣住民からの協力の申し出があった

○課題① 家族の説得

心配な点を明らかにしてもらい、それに対する対策を説明した。

- ・ 何かあったらどうするのか？
→ヘルパー事業所・居住サポートの緊急時対応、
福祉あんしん電話
- ・ 介助の心配はないのか？
→自立支援法・制度の説明、ケア計画表提示
- ・ 年金だけで暮らせるのか？
→特別障害者手当等の受給、生活費の試算表、
生活保護の説明
- ・ 再び施設には戻れるのか？
→厚労省通知(21,3,31付)、短期入所利用
⇒「よろしくお願ひします」との承諾をもらう



○課題② 生活介護の利用

- ・ 日中活動(ゴロバレー、ボッチャ、書道)の継続と入浴に不可欠だったが、定員増加への対応がとれず受け入れを断念した。

⇒以下のようにケア計画を修正して対処した。

- ・ 活動にはヘルパーの外出支援で市バスを利用して参加する
- ・ 入浴は移動入浴(週 1 回)の利用とヘルパーの介助(週 4 回)で対処する

○課題③ 住居探し

- ・ 居住サポート事業を利用してもらい支援センターが対応した。
- ・ 地域の大家さん(Hさん)の協力があり、ミニミニより 9 物件を紹介してもらうことができた。
- ・ 物件の見学に同行(21,10,15)
- ・ 一番条件に適した物件で契約交渉に入る ⇒ 入居成立(21,12,25)
- ・ 住居を先に確保してヘルパーの充足を待った。

○課題④ ヘルパーの確保

- ・ ヘルパー不足で難航は予想されたが…
- ・ 発信したことにより事業所間で協力要請をしてもらえた
- ・ 各事業所でヘルパーの確保に努力してもらった
- ・ 4ヶ月半かかったが、最終的に4社に名乗りを上げてもらった

○ケア見学・ケア会議 22,1,20

- ・ 合同ケア見学会と本人を交えたケア会議を開催
- ・ 地域移行予定日が 22,2,8 に決定！

○二人目の取り組み

- ・ 22年5月からBさん(52歳、身障手帳1級、脳性マヒ、区分6)の取り組みを開始
- ・ 先行例があると次はやりやすい→安心感の違いによるもの
- ・ 取り組み開始から5ヶ月弱で地域移行を実現した(22,10,12)

○実際に地域で暮らしてみても(本人たちの感想)

【良かったところ】

ゆったりと自分のペースで生活ができる、食事時間やメニューが自由に決められる
夜 11 時までの映画が見られる、ほぼ毎日お風呂に入れる・外出が自由にできる
責任感が増した、歯医者や理容店などを開拓できる

【困ったところ】

近隣の生活音が気になる、銀行の対応や市バスの利用勝手の悪さ

○なぜ今、地域移行なのか？

それをあらためて考えてみると…

- ・ 望んで入所した人はいない
- ・ 本人たちの長年の夢であり最後の機会
- ・ 制度やサービスが整った今がチャンス
- ・ 普通の暮らし(ノーマライゼーション)の実現
- ・ 施設に課せられた使命(個別支援計画実施)
- ・ 支援センターの本来業務

○地域移行が進まない理由

一般に言われる理由：バリアフリー住宅の少なさ、ヘルパー不足、ケアホームが利用できない、生活施設としての位置づけ、などに加えて、入所施設の構造的な問題がある。

○入所施設の構造的な問題 とは

【自己完結型のサービス】

地域の資源や制度を知らない、受け皿がないという思い込み、地域生活に関する情報を提供できない。情報(イメージ)不足→「施設を出たら死ぬ?!」と本人も職員も家族も思っている。

【自由や自己決定を制約された生活】

パワーレス状態 → 挑戦意欲の低下

○地域移行を困難にするもの

家族の反対・施設(職員)の消極性・利用者の高齢化(親の高齢化)

情報からの隔絶・本人のモチベーションの維持

○地域移行のために必要なこと

施設と支援センターの連携・制度や資源、必要経費等の情報提供・共有、
SOSの継続的発信、地域への協力要請(抱え込まなくていい)、利用者への啓発活動、
体験事業への参加、移行者宅への見学、施設(地域生活推進員)のバックアップ

○練習は必要なのか？

万全を期さなくてもよい、彼らには時間がない、パワーレスなのは当たり前、
不安を増大させず夢を持続させる、失敗しても戻れる

○家族をどのように説得するか

保証人・理解者として協力は不可欠、まずは話し合いの場を設ける
心配な点を具体的に挙げてもらう、具体的な対策(支援計画)を説明する、
本人の思いを確認してもらう、地域で暮らすことの意義を理解してもらう

○住居の選び方

バリアフリー住居はほとんどない、家賃は(生活保護を考慮して)4万5千円までを目処に
スーパーと銀行に近いところ、交通の便のよいところ
トイレ、浴室はセパレートで、浴室はなるべく広い物件を

○日中活動について

- ・ 入浴の確保と孤独感の解消等には不可欠だが…
- ・ 出身施設が利用できない場合、別の事業所を見つけるのは困難(資源が点在)
- ・ 介護保険のデイにはなじめるかどうか
- ・ 利用しない方法も考えてみる

○地域移行の波及効果

- ・ 地域移行が特別視されなくなり、個別支援計画の一つとして対応できるようになった。
- ・ 「彼ができるなら自分もできる！」という更なるニーズの発掘につながった。
- ・ 施設職員のスキルアップ、ケアマネジメント力、ネットワーク力の向上にもつながった。

○移行後の課題

- ・ 他人任せ的なところ
- ・ 経験不足による社会生活への影響(地理感覚、書類の見落とし、体重管理等)
しかし、これらは…

- ・ パワーレスにしてしまったツケ
- ・ 少しずつエンパワーしていくしかない
- ・ 失敗して学ぶことを恐れずに

○地域移行のススメ

- ・ 施設でなくても地域で生活できる人は少ない。
あらためて地域移行に必要なこととは…
- ・ 本人の想いを確かめる
- ・ イメージ作りのための情報提供
- ・ 支援者獲得のための情報発信
- ・ 支援者間の連携と熱意



2) 質疑応答・意見交換

Q：地域生活において「警察・消防・交通」は欠かせないものだと思うが、これらについて困ったことはあったか？

A：地域巡回バスはノンステップ表示がなく、乗ろうと思ったバスがノンステップではなくて乗れないことがある。交通局の事務所にクレームを言いに行ったことがある。

A：夜間巡回のヘルパー訪問時にドアが開かず、警察のお世話になったことがある。
ドアノブが回らなかったため、鍵業者を手配したが安否確認のための開錠は警察の立会いが必要とのことで、パトカー2台とバイク1台の警察官がやってきて大騒動だった。結局、ドアは開かず、窓ガラスを割って開錠することになった。ドアノブに車椅子の介助者グリップが引っかかっていたことが原因だった。

Q：モチベーションをどうやって維持してきたか？

A：自立体験事業を利用したことで、自分でもやれそうだという気持ちが湧いてきた。

Q：連絡を取りたい時にどういう通信手段を使っているか？また、困ったときに真っ先にどこに連絡するのか？

A：(Aさん) ハンズフリー電話を使用。バックアップ施設の地域生活推進員へ連絡している。
(Bさん) 携帯電話を使用。ヘルパー事業所やバックアップ施設の地域生活推進員へ連絡する。

Q：実際にサービス提供をしている側から何かコメントを

A：施設からの地域移行ケースに関わるのは初めてだったが、こんなにもハードルがあったのかという印象。一番は本人、周りの人たちの意識・情報・気持ち。安心安全が確保できるのかということが不安だったのではないかと思う。Aさんの移行初日の支援者の心配する顔や喜ぶ顔が印象深い。これまで自己決定の機会を奪われた人たちに、いきなり選択を迫ることは難しいことだと実感した。Bさんの移行前に本人、ヘルパー事業所数ヶ所、施設、支援センターでプランを持ち寄り、ケア計画を作成したことは画期的な取り組みだったと思っている。

Q：地域移行をいざ進めようとする社会資源が少なくてなかなか進まない。名古屋市以外の市町村では障害者の社会資源が少ないのが現状。バリアフリー住宅がなく、公営住宅の空き家待ちを2年している人もいる。地域移行を進めるにあたって社会資源、特に事業所の理解がキーワードだと感じている。

A：本来どの地域でも同じサービスが提供されるべきだが、地域差は確かにある。名古屋市は他の市町村に比べると社会資源も多く、支給決定も下りやすい。今回、地域移行が実現できたのは、この取り組みに理解のある事業所に会えたことが大きかったと思っている。

Q：地域移行をするにあたって居住地をどのように選んだのか？交通の便が良いということで名古屋市の中心地も候補地に上がっていたのか？
施設から離れた場所での生活を希望された場合、居住地となる支援機関として、どういう関わりができるのか、検討していく必要性を感じている。

A：(Aさん) 施設の近く。(Bさん) 交通の便の良いところ。
2人とも施設から車で10分ぐらいの場所に住んでいる。やはり頼れる人が近くにいるということが居住地を選ぶ上で大きかったのではないか。

Q：地域移行後、ケアプランの変更はあったか？

A：移動入浴の時間・曜日が変わるなど、細かな変更はあったが、基本的なプランは変わっていない。事業所を変更したことはある。

3) その他

地域移行推進部会では、地域移行啓発のためのパンフレットを作成。3 障害（身体・知的・精神）の地域移行者の生活をQ&A方式で紹介しており、今後、各施設や関係機関などに提供していく予定。